

司書課程・司書教諭課程室TAを通じて

大学院 文学研究科 独文学専攻 博士後期課程2年

松澤 智子

毎年度、多くの学生が司書資格取得を目指している。その理由は皆さまざまであろうが、かつて私自身が資格取得を目指した理由は、「大学図書館で働きたい」というものであった。公共図書館との違いや大学図書館特有の業務など考えず、ただ大学図書館で働くことを望んでいた。

資格を得て、大学図書館で働く機会に恵まれた。最初は、貸出カウンターの担当であった。覚えなくてはならない細かい業務が多くて大変であったが、大学図書館で働けることがとにかく嬉しかった。しばらくすると図書館業務全体の流れが見えるようになり、雑誌受け入れ業務に興味を持った。しかし、希望とは違いレファレンスを担当することになった。当初は業務に全く自信がなく、依頼者と話すこともできなかった程である。その様な日々が続いたある日、資料探しに困り果てた院生がレファレンスカウンターに相談に来た。資料を提示した数日後、礼を言いに来てくれた。それがレファレンス業務の大切さを気づかせてくれた瞬間である。

レファレンス担当者は、多種多様なデータベースを使いこなし、目的の資料を探し出して提示する。さらに、これらのデータベースの操作方法を教えることも重要な業務である。そして検索技術を磨くことと同様に重要なことは、コミュニケーション能力を高めることである。依頼者の依頼内容を上手に聞き出すことは、資料提供をするうえで必須である。「聞き出す」、つまり依頼者がぼんやりと抱えている依頼内容を「言葉にしてみよう」ために、上手にコミュニケーションをとることが重要となっている。この二つに加え、語学力、特に英語が必須であると言えるだろう。より高度な研究内容・研究成果を求める研究者は、図書館に対してその研究に似合った資料（情報）提供を求める。その一つが外国語資料である。また大学に

は、日本語が苦手な留学生もいるので、英語を話せることが望ましい。さらに加えれば、英語以外にもう一つ外国語ができることが理想である。

大学図書館で数年間働き、毎日熱心に勉学に励む学生を見ているうちに、私は再び大学で学びたいと思い始めた。そして明治大学に入学した。大学図書館に勤務していた頃に数回、明大図書館に問い合わせをしたことがあった。非常に誠実な対応で、素晴らしい大学図書館であると感じたことを覚えている。また、NIIで行われる図書館員の研修会に出席した時、明大図書館の職員さんも出席されており、その方が発表する姿から、「明治大学図書館の職員としての誇り」を感じたことを覚えている。現在学生として図書館を利用すると、職員の方たちは、親切で信頼できる方が多いことがわかる。司書課程の授業を受けている学生が図書館で働く機会を得た際には、母校の大学図書館の様子を思い出してくれることを願っている。

ついにTAができる最終年度になってしまった。この最終年度に課程室所蔵資料の請求記号変更ができたことは、幸運であったと言えよう。今までの請求記号では無理が生じてきたため、昨年度から準備を始めてきた。ランガタンの5法則の一つ「図書館は成長する有機体である」は、司書課程室にも当てはまるものである。TA全員で知識と知恵を出し合い、新しい規則を考えた。課程室がさらに成長して新たな規則を必要とするまで、自分がTAとして携わった業務の一つがしっかりと残ることを考えると嬉しいものである。

最後に、先生方や職員の皆様、そして他のTAから親切にいただき、楽しく業務に携わることができた。充実した4年間がおくれたことに深く感謝し、お礼を申し上げる。